
クリスマスイブ

おもえろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスイブ

【Zコード】

Z6375P

【作者名】

おもえろ

【あらすじ】

妻との死別から一年半、井関正一は四歳の娘と一緒に暮し、大変だ
けれども結構楽しく過ごしている。そんな折、井関は妻とともに似
ている女性に出会う。娘もクリスマスにはサンタさんが来てママを
プレゼントしてくれると言う。井関は妻と似ている女性と何度もかす
れ違い、お互に惹かれあうものを感じる。クリスマスイブどんな
奇跡が起こるのだろうか、、、

十一月に入つて寒さが一段と増し、駅へと続く街路樹の枯葉が舗道に落ちて、風に吹かれる度にカラカラと音を立てている。ここは人口三十万程のある地方の中心都市、夕刻六時少し前の駅周辺には帰宅する為に駅へと向かうコート姿の人達が大勢信号待ちをしていた。井関正一もこの中にいて信号が青に変わると同時に人ごみの中に押される様に改札口を目指して足早に歩いて行く、改札口を抜け下り線のホームへと向かい、滑り込んできた電車に乗り、三十分程ゆられて五つ目の駅で降りる。そこは井関の会社がある県都から二十キロ離れたベットタウンの町で、井関は駅裏の駐車場に置いてあるマイカーに乗り換えて、一人娘の奈美を預けてある保育園に迎えに行く、これが月曜から金曜までの井関の変わらぬ日課だった。午後七時までの延長保育、毎日だから奈美には可哀想だが現状ではどうしようもない。たまに待ちくたびれて寝てしまつことがあるが、たいていは首を長くして井関を待つてゐる。今夜はどうだろう、娘を迎える抱き上げる瞬間が、井関にとって最も満たされた時間でもあつた

「すいません井関です、」

「パパーッ！」

保育園の玄関を開けて声をかけると

教室から駆け足でやつて來た奈美が勢いよく井関に抱きついた。

「やあ、ただいま、おりこうさんにしてたか、」

この瞬間が来て初めて安心感に包まれることが出来る、何ものにも勝る瞬間、会社のこともあわただしい家のことも、両方忘れてしまふ唯一の時だつた。

「はい、奈美ちゃんバツクよ！」

保母さんが奈美のバツクを持つて教室から出でる。

「お世話をまです、ありがとうございます。奈美、ほりつ先生にちやんと挨拶して、」

井関がバツクを受け取りながら手で奈美的肩を押すと、

「先生さようなら！」

奈美は膝に手を当てて礼儀正しく挨拶をした。

「はいさようなら、また明日ね、」

保母さんが答えるまもなく奈美はぐるりと向きを変えて井関の車の方へ駆け出してゆく、このへんがまだまだ幼児そのもので、井関も挨拶をそこそこにして奈美的後を追いかけた。

車に乗ると奈美はいつでも井関の背中にくつついて立つて、井関の首に可愛い小さな手を回しておんぶをしている格好になる。運転するには少しきゅうくづだが、ほんのしばしの我慢、心地よい我慢だった。

「真っ赤なお鼻のトナカイさんは、いつもみんなの笑いもの、でもその年のクリスマスの日、サンタのおじいさんはいましたー、真っ赤なお鼻のトナカイさんはーー”

今日保育園で習つたと言つて、奈美が首を振りながら歌いだす、井関は奈美的しぐさをにこやかにミラーで見ていたが、いつのまにか一緒に歌つていた。

十分位走つて井関の家に着く、四LDK築五年の小さな家だが、一応マイホーム、玄関のドアを開けて電気をつけると、靴を脱いだ奈美がまっすぐリビングへ入つて行き、テレビのスイッチを入れその前に座つた。

「ほりつ、奈美、お家に帰つたらどうするんだつけ？」

「ハーアーイ、」

奈美は井関の言葉に立ち上がり洗面所へ早足で向かい、声を出しながらうがいを始めた。

「ガラガラガラガラガラー！」

「三回だよ、おまけなしだぞ！」

「ガラガラガラ！三回ちゃんとやつたよー。」

濡れた手をブラブラさせながら洗面所から出でると、

「パパー、タオル、タオル、

「パパはご飯を作るんだから奈美一人でしなさい、タオルはちゃんと洗面所の棚の中にあるはずだよ。」

「ハアーイ、」

奈美がもう一度洗面所に行つて、タオルを持ってリビングに戻つて来る、そして手を拭き終えると、再びテレビの前に座りこんで漫画の番組を見始めた。それから三十分程経つて一人の夕食がやつと始まる、今夜の献立はクリームシチューごーじご飯とサラダ、そしてワーグルト、けつこう手間ひまかけて作つてゐる、寸評はまあまあまい、奈美が文句を言わなければそれで良いと思つてゐる。夕食時に一日の出来事を、と言つても奈美のことだけであるが、聞き出さなくとも奈美がかつてに報告するようになつてゐる。今夜もそうだ。

「パパー、はるかちゃんのママとつてもきれいだよー。」

「そうかー、」

「はるかちゃんお迎えに來た時ね、いつも遊んでくれるの、奈美、はるかちゃんのママならいいんだけどなー、」

「そうか、そんなにはるかちゃんのママはいいのか、」

「ねつ、パパ、はるかちゃんのママと結婚したらー！」

当然、はるかちゃんには両親が健在な訳で、その辺の情況が良く理解出来ない奈美に井関は毎度苦笑しごまかすしかなかつた。翌朝、井関家の朝はあわただしい。まず、奈美のお弁当作り、簡単にごまかす訳にはいかない、見せ合つて食べるのにならわしになつてゐらしい。そうなると可愛く可愛く作らねば奈美を泣かすことになる。毎日が食材の工作みたいなものだ。これで食育になるのだろうが、どうせなら給食になつてくれないかと井関は思つたりする。お弁当が出来たらキティちゃんのハンカチで包んでバックに入れる、その間もなかなか制服が着られない奈美を手伝つてゐる、それが済むと

やつと自分の身の回り、スースを着て、テーブルの上のトーストを一枚くわえて飲み残した牛乳を冷蔵庫にしまう。

「ああ出かけるぞー！行つてきますしたのかい、」

「そうそう、」

リビングの棚の上に飾つてある妻の遺影の前に行つて小さな手を合わせる。

「ママ、行つてきます。」

井関も同じ様に妻の遺影を見ながら小さくつぶやく、これがふたりの朝の風景だつた。その日の夕刻、仕事を終えた井関が駅へと向かう、コートのポケットから定期券を取り出して改札口にさしかかるとしていた。反対側の改札口には今電車を降りて来た人達が並んでいる、井関はぼんやりとその人達を眺めていた。何も変わらない時に流されるままの光景、この日もそんな変わらない毎日の、一区切りの中に自分がいると思つていた。 どう何も変わらないと、 その人が現れる迄は、 、 、 ぼんやりとした井関の視野の中に、次第にくつきりと一人の女性の姿が入つて來た。 その人はグレーのコートに身を包みどんどん近づいて來る、 長い髪をしたかなり長身の女性、 井関はすれちがいざまにはつきりとその女性顔を見た。 その瞬間井関の心臓は止まつた、 身体も凍りついた様に動かなくなつた。後ろから押し寄せて來る人の波にはじかれて転びそうになり、 やつと井関の心臓と身体が動き出した。

。 井関は我にかえつて慌てて振り返り、 今すれちがつた女性を田で追つた。しかし、 雜踏に呑み込まれたのか、 その女性の姿は見えなくなつてしまつた。まるで消えたように、 、

「奈緒美、 、 、

井関は妻の名を呼んでしばらくその場に立ち尽くしていた。

その夜、 家に戻つた井関は奈美を寝かしつけてからビールを飲んだ。毎日晚酌をやつていてる訳ではなく、 飲みたいと思つた時の為に缶ビールを少し冷蔵庫の中に入れて置いた。リビングのソファーにもたれながらビールを飲む、 今夜はどうしても飲みたい気分だった。井

関の眼は棚の上にある妻の写真に止まっている、駅ですれちがつた女性の顔と妻の顔が交互に井関の眼の中に入ってきた。

「違うよな、奈緒美がいる訳ないもんな、」

妻の写真に向かってそうつぶやき、缶ビールをいつきに飲み干して静かに眼を閉じた。―――追憶―――一年半前、

妻の入院している病院、臨終を迎えるとしている妻に寄り添う井関と奈美、主治医が妻の容態を診て腕時計を見る、そして深々と頭を下げて病室を行つた。井関は嗚咽の中で奈美を抱きしめる、奈美は小さなぬいぐるみを持ったままになにもわからずキヨトンとして井関の顔を見つめていた。葬儀が済んでからも毎日、奈美は家中のあちらこちらを探し物をしているみたいに歩き回つている、「パパ、どうしたんだろ?、ママいないよ、病院から帰つて来てお部屋で寝ていたのに、どこへ行つちゃつたの、、、」

奈美はあのね妻の奈緒美が死んだことをよく理解していない。どう話したらいいのか井関はわからなかつた。理解させたら悲しませることになる、いつそのこと今まで奈美が妻のことを忘れてしまつたほうがいい、そうなることを井関は願つた。それ以外どうすることも出来なかつた。

「奈美にはパパがいるんだからいいだろ?、ほらっ、怪獣だぞ!、奈美は怪獣になつたぞ! ガオー!」

井関は奈美を抱き上げて肩車をして家の中を大声を出して歩き回つた。いつもならこの怪獣の先には妻の逃げ回る姿があつた。井関と奈美が怪獣となつて妻の奈緒美を追いかける、あの柔らかい奈緒美の笑い声がリビングやキッチンや他の場所で聴こえて来る、でも、この日はどこへ行つても奈緒美を捕まえることが出来ない、捕まえそうになるとスースと奈緒美の姿が消え、別の場所で笑い声がする、次々とその声のする所を手指すのだが、どこへ行つても奈緒美を捕まえることが出来ない、井関はいつのまにか奈美を肩車に乗せているのを忘れ、とりつかれた様に奈緒美を追い続けた。

「パパー! 嫌だよパパー・下ろしてよ!」

奈美が井関の肩の上で騒ぎ出した。

「パパー、パパー、」

さかんに井関を搔きつけて声を上げている。

「んー、何ー、」

奈美の声におこされて井関は夢を見ていたことに気が付いた。

「夢だつたのか、、、んー、どうしたんだ奈美、、」

「パパの声が大きくて奈美おきちやつたの、パパー、お部屋で寝なきやダメでしよう！」

「そうかパパがおこしちやつたのか、ごめんごめん、それじゃあお部屋で寝ような、」

井関は奈美と一緒に寝室へ向かう、リビングのライトを消す前に妻の写真をもう一度見た。次の日から、井関は駅の改札口ですれちがつた女性に再び会えることを願つて、駅前で待つ習慣が出来た。一日だけのすれちがい、もつそんなことはないかも知れない、それでも井関の足は駅前で止まっていた。初めて出会った日から四日が過ぎた、もしやの期待を抱いてあの女性を待つた、しかし、あの女性は現れなかつた。

「あり得ないことだつた。」

井関は気を取り直して改札口へ向かう、駅前のロータリーに飾り付けられたクリスマスツリーのイルミネーションが光り輝いていた。

「ねえパパ、今度のクリスマスきっといことがあるよ。」

「ん、クリスマス保育園のクリスマス会のことかい、」

「それもあるけど、もつともつとすつじくいこと、」

「何だいそれ、クリスマスのプレゼントのことかい、」

「ピンポーン！」

「奈美はクリスマスプレゼント何が欲しいんだい、言つてごらん、パパもサンタクロースにお願いしとくからで、」

「あのね、もう決まつていいの、奈美もうサンタさんにたのんじやつたもん。」

「えーつ、早いなあ、いったい何をお願いしたんだい、パパにも教

えてくれないか、」

「えへへ、どうじょうかなあ、秘密なの、」「秘密」、でも、奈美一人よりパパも一緒にお願ひした方が、サンタさんよーく覚えてくれそうな気がするけどなあ、」

「ほんとー、じゃあ言つちやおつかなあー」

ちなみに、奈美はまだサンタさんイコールパパであることを知らぬ、この年頃が世界中で一番サンタクロースに愛される子供達にちがいない。

「言つてじらんよ、何なのだい、」

「あのねー、奈美ねー、ママが欲しつてサンタさんにお願いしたの。」

「えーっ、ママだつて本当にお願ひしたのか、」

「そうよ、だつて、先生が一番欲しいものをお願いしたらつて言つんだもの、だから奈美、ママのことお願ひしたの、」

井関は奈美に笑いながら頷いたけれど、すぐに難しい顔をして妻の写真を見やつた。奈美は嬉しそうにハンバーグを食べている、井関も一緒にお願いするということになつて、確実にママがクリスマスにやつて来ると思い始めたのだ。

木曜日の夕刻、井関はコートの襟をつかんで改札口へ向かつ、一週間前に出会つた女性のことは井関の脳裡から消え、どこを見るとでもなく以前のように俯き加減で歩き、人の波に呑まれてなされながらままになつていた。改札口を通り過ぎた所で、反対側の列の人々が身体が接触して、井関は右手に持つていた定期券を落としてしまつた。

「アツ、ごめんなさい、」

接触したのは女性だつた。その女性が素早く井関の定期券を拾つて井関に手渡そつとした。再びその女性の声が井関に届く、

「ごめんなさい、」

その女性から定期券を渡された井関はその場で凍り付いてしまつた。定期券を手にしたまま呆然として彼女を見ている、その様子に彼女

は再び声をかけてきた。

「どうしたんですか、」

井関は我に返つて慌てながら、

「あつどうも、、ありがとう、、、」

彼女は控えめな笑顔を見せて一礼をし井関の元を去つていった。井
関は振り返つて彼女の後姿を見送つてゐる、見えなくなる迄ずっと、
、、、

「また会えた、、、夢じやないよな、、、」

渡された定期券を握りしめたまま彼女温もりを感じていた。

奈美を寝かしつけた後、井関はリビングで缶ビールを飲み始めた。
つまみはけんさきいかとかきの種、妻に似た女性に再び出会い、さ
らに今夜はその声を聞いたことで井関の頭の中は混乱していだ。二
缶目のビールを開けて棚の上に置いてあるラジオのスイッチをオン
にした。毎朝時計がわりに朝番を聴いているが、夜ラジオをかける
ことはなかつた。音楽か人の声、今はそれが欲しかつた、たまらな
く、、、ラジオから

最初CMが流れてきて、それが止むとアナウンサーの声が聴こえて
きた。

「ハーアーイ、こんばんわ、今夜も恋するのお時間がやつてしまいりま
した。パーソナリティーの藤田めぐみです、どう、みんな、素敵な
恋してますか、今夜のオープニング、福山雅治で虹、まず聴いてね、

「

――曲が流れる――

井関はうつろな眼をして聴こえてくるラジオをずーっと見ていた。
ラジオ局の放送室にいるアナウンサーアーの藤田めぐみが、マイクを
前にして葉書やメールを見ながら話し出す。

「あらためてこんばんわ、藤田めぐみです。もうすぐクリスマス、
恋人達の季節がやつて来ますね、駅前のツリーにもイルミネーションが
点灯して街はクリスマス気分一色、通り行くカツブルを横目に
今夜も一人でIRSにやつて来た私、今年も山下達郎のクリスマス

イブを聴きながら、一人さびしくシャンパンを空けるのでしょうか、三十を過ぎて急に愚痴つ

ぽくなつた私、あーあー、誰か素敵な人現れないかしら、なあーんて湿つぽい気分をこの曲でおもいつきり変えちゃいましょう、リンドリンダよ！、」

―――曲が流れる―――

「気分も変わつたところで今夜のお便りを紹介しましょう。M市にお住まいのラジオネームピーターパンさんからのメールです、――俺、先週K子とちょっとしたことで喧嘩しちゃつたんです、それから今日で一週間K子と逢つていません。でも逢えなくなると考えるのはK子のことばかり、あらためてK子のことが好きだと分かりました。それでゴメンと一言メール送つたら、私もあやまるうとしてたつてメールが返つて來たんです。お互ひ割れそうになつたハートを元に戻すことが出来ました。クリスマスには一人の思い出の場所、ディズニーシーに行つて、愛情を再確認し合つことになりました。――ピーターパンさん仲直りしてよかつたじやない、あやまるタイミング難しいけど、先にあやまつちやつた方が絶対いいよね、素直になるつて大事なことよ、ディズニーシーでうまくやれ、コノヤロウー！それじゃあーリクエスト曲スマップの世界に一つだけの花かけてあげちゃう。」

―――曲が流れる―――

「今日ね私IRSに来る時、ちょっと私好みの男性に出会つたの、そう、私より少し年上の人という感じかな、とつてもさびしそうな眼をしていて、たぶん失恋でもしちゃつたのかしら、私慰めてあげようかなあーなんて気分になつて、でも、私にはIRSのお仕事が待つてゐるし、どうすることも出来なかつた。悲しいわ、また会えるといいな。ハーア、それでは一人目のお便り、恋に悩む乙女こと、○町のM Aさんからのお葉書です。」

井関は缶ビールを飲みながらラジオを聴いている。ラジオからはパーソナリティー藤田めぐみの声が流れていた。井関は急に立ち上がり

り、リビングの壁際にある棚の中をまさぐり始めた。ソファーに戻つて来た時、井関の手にはボールペンと数枚のレポート用紙があつた。しばらくボールペンを握つて天井を見上げていたが、レポート用紙に眼を定めるとそこに何かを書き始めた。ラジオからリクエスト曲が流れている、その間中、井関は黙々とレポート用紙にボールペンを走らせた。

「藤田めぐみの今夜も恋する、そろそろお時間です、恋にお悩みのあなた、めぐみにお便りくださいね、それじゃ、今夜のラストソング、こんなイブにならいことを願つて少し早めにかけちゃいます。山下達郎のクリスマスイブを聴きながらお別れ、また来週ね、――曲が流れる――

井関はレポート用紙を破つて缶ビールを飲み干し、リクエスト曲の終了と同時にラジオのスイッチを切つた。井関は土日が休日、それはあくまで娘の奈美に合わせてのローテーションになつていた。今日は家の近くの川に遊びに来ている。堤防上のアスファルトの道で奈美の自転車乗りを見てやる為だ。勿、補助輪付の幼児用自転車で、最近はこの遊びが定番となつた。

「今日は遊園地でなくてよかつたのか？」

「うん、いいの、」

「たまには遊園地へ行つてもいいんだぞ、」

「はるかちゃんもゆみちゃんもパパとママと一緒に行くの、お絵かきの時いっつもパパとママをかくのよ、奈美は遊園地に行くとパパだけしかかけないから、いいの、」

「そうか、それで自転車なのか、、、、」

「自転車ははるかちゃんもパパだけなの、」

奈美にそう言われて、井関は情けなく思つた。その情けない顔のまま奈美の自転車の後を追つた。今週の休日はなんて休めない休日なのだろう。井関は妻の両親を家に迎えて、じつとしていられない時間を過ごしていった。奈美はお婆ちゃんの膝の上で、赤鼻のトナカイを首をふりふり歌つてゐる。井関は義父と将棋の一戦、その間中

も接待ゴルフの様な感じで気を配っていた。

「なあ、正一君、もう奈緒美が逝つて一年半になる、そろそろいいんじやないのか、何も私らに気兼ねすることはないんだよ。奈美には、すぐにも母親が必要なんだから、どうだい、再婚のこと真剣に考えてみないかい。」

義父も義母も本音ではないだろつと井関は思つ。出来ることなら全てを信じたくない、今この場所に奈緒美がいないことを信じたくないのだ。

「一年半がすぎました。でも、私にはまだ一年半という感じで、奈緒美への思いはなかなか断ち切れないのです。」

同じことを何度も言つたろう、自分の中に、

井関にはとつてもスピードな時の流れが漂つていた。義母が涙もろくなつたのか目頭をおさえている、奈美がそんな義母を見て、さかんに、おばあちゃんどうしたの、とたずねていた。

「本当に奈緒美は幸せだねえ、正一さんにいつまでも愛されて、でも、再婚する機会があつたら、どうかためらわずにそうしておくれ、私達はいつまでも正一さん親子を見守つているからね、」

義母の言葉に素直に頭下がつた。

「ありがとうございます、お父さんお母さん、いつでも奈美に会いに来てやってください。奈美会いたがっています。」

こんな苦しい日々はいつまで続くのだろう、ありがたいことだけど、普通の再会がどれ程良かつたか、井関は今になつて思い知られていた。

木曜日の夕刻、六時少し前、このところ一週連続で例の女性に会つてゐる、今日も会えるのではと井関は密かな期待を寄せて改札口の手前で待つた。彼女がやつて來た、白いコートにブーツ姿、長い髪をなびかせて改札口を抜けて来る、一緒に歩いている女性と話が弾んでいる様子だった。井関は彼女の姿を眼で追つた、こういう時は不思議と相手も気付くもので彼女の視線も井関の存在を確認していた。お互いの視線がタイミング良く合つ、一瞬ではあるが、止ま

つた時間の中でお互いの何かを確認しあっていた。先週井関と彼女は改札口の所で接触した、その時井関は定期券を落とし、それを彼女が拾ってくれた。その時のことを見えていて井関を見た、只、それだけのことだ、それ以上のことはなく、彼女は連れの女性と再び話し始めて足早に去つて行つた。

その日の夜、井関は冷蔵庫から缶ビールを取り出して飲み始めた。ピーナツの袋を開けて二、三粒をほうばり、ラジオのスイッチをONにした。ラジオからは十時の時報の後アナウンサー、藤田めぐみの声が聴こえて来た。

「ハーアこんばんわ、今夜も恋するのお時間がやつてしまいりました。パーソナリティーの藤田めぐみです。どう、みんな素敵な恋してますか、今夜のオープニングはヨーミンのこの曲、ルージュの伝言から始めちゃうよ、」

――曲が流れる――

「あらためてこんばんわ、藤田めぐみです。今夜は私がとつても感動してしまったお便り、みんなに聴いてもらいたいと思います。乙町のS.Eさんことやもめのジョナサンから少し長いお手紙が届きました。今夜はこのお手紙を♪紹介したいと思います。ジョナサン聴いているといいなあー、」

井関はラジオからのめぐみの声を聴いて、飲んでいた缶ビールに突然むせり出し咳き込んでしまった。おまけに缶ビールをテープルに置き損ね、残りのビールがテープルの上に流れ出し、慌ててダスターで拭き取る、空のビール缶が弾き飛ばされて床を転げて行つた。ここ迄が一連の出来事で、その後、井関は周囲を確かめる様に見回して、当然であるが、誰も見ている訳がないことを知らされて、ソファーに深々と身をゆだねそれから目を閉じた。

「初めてお便り差し上げます、私のようなバツイチの者が、あなた様の番組へお便りする等、見当はずれのように思われるでしょうが、誰かに私の胸の内を聞いてもらわないと、一人でいつも迷路の中にいるようで、出口がなかなか見つからないのです。私は一年半前妻

と死別し、今、四歳の娘と一人暮らしをしています。男手一つで娘を育てる苦労話をするつもりはありません。娘との暮らしま、不自由ながらも慣れればけつこう楽しいもので、娘も一年位前迄は——ママどこへ行つたの?——と妻の死を知らないようでしたが、今ではしつかりと受け止めて、小さな手を妻の遺影に合わせて毎日保育園へ通っています。私も妻のことを忘れようと努力し、娘のように強くなれたらと思っているのですが、ふとした折に、愛しい妻の面影を偲んで言いようのないさびしさを感じてしまいます。先日も、会社の帰りに雑踏の中で妻にとても似ている女性と出会い立ちすくんでしまいました。忘れようとしているのですが、どうしても私の中の妻は消えてくれないです。——ねえ、パパ、今度のクリスマスにサンタさんがママをプレゼントしてくれるのよ。——娘がおかしなことを言つのでたずねたら、一番欲しいものをサンタさんにお願いしたらつて、保母さんに言われたそうです。まさか一番欲しいものが母親だとは保母さんも思わないでしようから仕方がありませんが、困つてしましました。娘もママがこいしいのでしょうか、いくら私の生活に満足していたとしても、それは一本足りない十二色入りのクレヨン箱なのでした。その色は残りのどの色を混ぜても出来ないのです。娘の為に再婚も考えるのですが、今までは自信がありません。私が妻のことを忘れなければ、新しい女性と結婚出来たとしても、多分、その女性を不幸にしてしまうでしょう。苦しい日々が続いています。雑踏の中で妻に似た女性に再び会いました。正直言つて吸い込まれそうな程その女性に惹かれました。でも、それは妻の面影を追い求めているのか、それとも違うのか、よくわかりません。どこの誰だかわからない、それだから余計胸騒ぎを覚えるのです。こんなことで、私は当分立ち直れそうにもありません。私は救いようのないいくじなしです。」

ジョナサンの手紙を読んで、パーソナリティーの藤田めぐみはコメントを出した。

「んー、難しいわねえ、こんな感じよくわからないけど、別れた人

より死んでしまった人の方が忘れられないって聞いたことがあるわ、
多分、ジョナサンもそんな風なんでしょうね。愛し合っていた二人
が突然死によつて引き裂かれてしまうんですもの、喧嘩とか浮気し
たとか、そんなんじゃないんですけど本当につらいわよね、私だつ
たらどうするんだろう、んー、もう考えられないわ、愛する人が全
てだつたら、ひょっとして死んじゃうかも知れない。アツ、ごめん
なさい、ジョナサン、あなたには可愛い娘さんがいるものね、私の
言葉不謹慎だつたわ、ごめんなさい、四歳の娘さん、ママのこと本
当は恋しくてたまらないのね、それを、小さな手を合わせて毎日お
祈りしてるなんて、私その姿見たらきっと泣いちゃうわね、私、そ
れだけで、多分その娘さんのママになっちゃうかも知れない、ねえ
ジョナサン、奥さんに似た女性に会つて胸がズキーンとしたんで
しょう、それって、多分恋と同じ感情よね、奥さんの面影追い求め
てのことでしょうけど、その女性は絶対に奥さんじゃないのだから、
一度目に会つた時も同じ様に胸がズキーンとしたんだじょ。ね
えジョナサンあなたはまだ大丈夫よ、あなたは必ず新しい恋が出来
ると思うの、奥さんが胸の中にあつたってかまわないから、どうど
うと新しい恋をした方がいい、娘さんの為にだけなんて思わないで、
あなたの為に新しい恋人を見つけて結婚してください。それが本当
に娘さんの為になると思うわ。こんな勝手なこと言つちゃつてごめ
えんなさい、てつとりばやく、私があなたの会つた女性ならいい
のにね、アーツ、また不謹慎なこと言つちゃつたみたい、——反
省——またお便りくださいね、待っています。それでは今夜のラ
ストソング、岡本たか子の夢をあきらめないで、私からジョナサ
ンへ送ります。——曲が流れ——
ディレクターの岡良子が、放送室から出て来た藤田めぐみにコーヒー
を渡しながら話しかけた。

「お疲れ様、」

「ハイお疲れ様、」

「ねえめぐみ、今夜の凄く良かつたよ、かなりの反響あると思つよ。

「

「しかし、世の中にはこんな悲しい運命を背負つた人もいるのね。私なんかいつまで経つてもいかず後家だけど、運がないなんて言ってられないわね、ジョナサンに比べたら百分の一にもならないもの。」

渡されたコーヒーを両手で包んで感慨深げに言葉をつないだ。
「みんなこうして頑張つて居るのよ、それに、めぐみ、あなたの声がジョナサンばかりでなく、沢山の人達の励みになつてんだからね、あなたもそのつもりで頑張んなさいよ。」

「そうね、番組作りに力が入るわ、おかげで恋愛なんてどんどん縁がなくなっちゃうけど。」

「言いなさんな、人間なんてどこでどう結びつくかわかんないんだから、これから先まだまだチャンスはあるわよ、そうそう、先週の放送で言つてたでしよう、さびしい眼の男性、その人はどつなの、駅前で張つてて捜してみたら、」

岡良子はめぐみより一つ先輩のティレクター、既婚者で子どもが一人いる。めぐみには大切な相談相手だった。

「そうなのよ良子、それがね、今日IRSに来る時にまたあつちやつたのよ、それも今日は、ちょっととの間だけお互い見つめ合つてさ、何か運命を感じたわ。やつぱりさびしい眼をしてたの、あんな眼見たら私もうたまんないわ。仕事がなかつたら、理由なんて何でもいいから話しかけていたと思うわ。」

「それって運命よきっと、恋愛したらその人と、クリスマス迄にまだ間に合つよ。」

一方、井関の家のリビング、テーブルの上にビールの空き缶が五缶並び、ビーフジャーキーの袋が二つ空になつて無造作に置かれている。まだ飲み足りないのか、井関は冷蔵庫の中を缶ビール目当てに探し回すが、日頃飲んでいる訳でもないから底がついていた。普通ならこんなに飲まないのだが、今夜は特別で、さらにウイスキーの水割りを一杯、それでも井関は酔えなかつた。自分の書いた手紙が

放送されるなんて思いもよらなかつた。放送して貰う為に手紙を出した訳ではない、なんとなく不安な気持ちを誰かに話したい、只それだけでパーソナリティーに手紙を書いたのだ。返信なんてさらさら考えも及ばない、それがラジオの電波に乗つて自分の耳に入つて来たのだから驚いてしまつた。そして恥ずかしさもやつて來た。この二つをアルコールで追いやろうとしたのだが、井関にとつて手強い相手になつた。ラジオは既に次の番組を流している、井関は手を伸ばしてスイッチを切つた。

「パパー、パパー起きて、起きてよー。」

奈美の声がする、何だらう、まだ夢の中なのか、やつと目を開けて壁の時計を見た。七時半になろうとしている、井関は慌ててソファーから起き上がつた。

「しまつた、寝すぎたか！』

「もうつ、パパつたら起きないんだもん、』

「ごめん、ごめん、すぐ用意するから、』

携帯から会社に電話をかけて遅れて出勤することを告げ、大急ぎで奈美の朝食とお弁当を作り始めた。奈美は制服を一人で着ていたが、「パパ、ボタンボタン、』

「ちょっと待つて、今奈美のお弁当作つてるから、そこの牛乳飲んでて、靴下はいたかい、』

「はいたはいた、パパハンカチ出してねキティちゃんの、』

「ほうら出来た、奈美、今日のお弁当サンドイッチだぞ、バナナも入れとくからな、みんな食べるんだぞ、そうだ、ボタンにハンカチと、』

井関はお弁当を奈美のバックに入れ、リビングの小物入れの中からハンカチを取り出して、奈美の制服のポケットの中へ、そしてボタンをはめてやつた。

「さあ、用意できたぞ！出発、出発！』

「待つて、ママに行つてきます、』

井関は奈美にうながされて妻の写真と一緒に手を合わせた。

井関は大手の建設会社の営業課に所属している。遅れて出勤して来た為にさつそく課長のデスクの前でしばられた。

「井関君、君もろそろ再婚して新しい家庭を持った方がいいんじやないのか、家庭がしつかりしないと仕事もうまくいかないよ、会社もいつまでも君に振り回されている訳にもいかないし、私だつて、そういうつまでも君をかばつてはいられないからね、」

結婚式で仲人をして貰つた課長のMにはそれだけでも頭が上がらないが、仕事上でも、妻の死以後色々と面倒を見て貰つていた。

「はあ、申し訳ありません、御迷惑かけないよう頑張ります。本当に申し訳ありませんでした。」

井関もこれ以外の返事はなかつた。別の返事をするとなれば、退職の一文字がそれ当てはまる、既に井関はそのことも考え始めていた。「そうしてくれよ、今迄の君の実績があるからもつてているけど、今年の君は最下位転落だ、正直言つて来年は君の進退を決める年になる、勝負をかけるには家庭が磐石でないと無理だ、わかるかね、」課長の言葉はきつかった。でもそれは仕方のこと、井関は自覚過ぎる程自覚していた。課長のデスクから自分のデスクへと向かう、壁面に張られた営業成績を表すグラフが眼に留まる、井関の成績が左端に記され、ダントツに悪い、ため息をついて自分の席に戻つた。営業課の事務所は一人の女子事務員と課長がいるだけで、他の社員は既に出払つている、しのぎを削る世界、井関のいる場所ではなくなりつつあつた。

「井関君、何をのんびりしているんだ、君の仕事何だ、」

課長の叱責に、井関はファイルを抱え鞄を下げて、慌てて事務所を出て行つた。階段を下りて一階のスペース迄辿り着くと、経理課のドアが眼に入つて來た。ここはかつて妻の奈緒美が結婚前に働いていた所、ドアが開いていまにも奈緒美ができそうな気配がした。とその時、偶然にもドアが開いて井関はドキリとして立ち止まつた。出て來たのは新人の女子事務員、井関は落胆してそのまま会社を後にした。

「なあ奈美、今度なあ、パパのお仕事が変わつたら、多分よその所へ引っ越すようになると思うんだけど、いいかい、」

いつもの様に夕食での親子の会話、井関の心は転職と転居に決まつて、いたが奈美の意見はどうだらうか、井関はためしに聞いてみようと思つた。

「どこへ行くの？」

「まだ決めてない、」

「あのね、今度のクリスマスはここにいるんでしょう。」

「ああ、多分お正月もここにいるよ、」

「よかつたあ、」

「奈美はここの方がいいのかい、」

「ううん違うの、クリスマスにね、どこかよそへ行っちゃうと、サンタさんが奈美の住んでるお家わからなくなるでしょ。そしたらサンタさん来てくれなくなっちゃう、そんなの奈美いや、ぜつたいぜつたいいや、お家わからなくてサンタさんママを連れて帰っちゃつたら、また次のクリスマスまで待たなきやならないのよ、そんなの奈美いや、パパもいやでしょ。」

「サンタさんがママをねー、」

井関は首をかしげて難しい顔をした。奈美はテレビを見て笑つてゐる、今度のクリスマスはどうなるのだろう、・・・、

この夜、井関は三通の文章を書いた。一通田は会社に出す辞表、二通田はラジオ局へ出す報告の手紙、そして三通田は妻奈緒美への詫び状だった。――奈緒美への詫び状――

「奈緒美、俺、奈緒美には悪いけどこの家出ることにしたよ、会社も辞めるどこか別のところへ行つて、もう一度初めからやり直すことにしたんだ。この家や会社は奈緒美の思い出がいっぱいつまつてゐる、俺はその奈緒美の思い出に押し潰されそんなんだよ。このままの情態では俺は駄目になつてしまつ、俺はいつまでもめそめそしている意氣地なしから脱出来ないんだ。こんな風じや奈美を育てられない。折角奈緒美が残してくれた宝物を大切にしなくちゃなら

ないのに、その自信がないんだ。だから、俺は思い切つて奈緒美の思い出を断ち切つて、全く何もない別の所へ行くことに決めたんだ。奈緒美はきっと怒るだろ？ね、君を忘れようとしているんだから。でも、決して君を忘れようと本気で思つているのじゃないんだよ、君のことを思い出しても泣かないようになる迄、君の思い出から離れていたいだけなんだよ、わかつてくれるといいんだけど、どうかな、怒つて罰を下すとしても俺だけにしてくれ、俺はいつでも奈緒美のそばに行きたいと思っているから、・、でも、そうなると奈美が可哀そうだから、出来れば、奈美に結婚する相手が決まってからにしてくれないか、そうしてくれるとありがたいくど、・、愛する奈緒美、奈美が今度のクリスマスにサンタさんがママをプレゼントしてくれると言つているんだ。まさか、君がもう一度俺達の所に戻つて来るなんてこと、そんな奇跡みたいなことありえないよなー。」井関は書き終えた三通をそれぞれの封筒に入れて、一通は鞄の中、そして一通を妻の写真の前に置いて寝室へ向かつた。

十一月二十四日、クリスマスイブ、

藤田めぐみは電車を降りるとすぐに改札口の方向を見た。今日会つたらどうしよう、声をかけようか、あつかましいと思われないかな、そんな胸の内でいつもより騒がしい気分だった。改札口を抜けた所で立ち止まり、駅へ向かってくる人達を確かめるように見た。先週は会えたのだ、だから今日も、・、多分、会えるかな、そんな期待がどんどんしぶんでいった。通勤時間の五分間は長い時間だ、その間にどれだけの人が前を通り過ぎただろう、その中にめぐみの会いたい人はいなかつた。

「今日は会えないのかなあー、」

めぐみはコートの襟をつかみながらゆっくり舗道を歩き出した。さびしい眼をした男性に会えなかつた、失望感にまとわれながらいつも道を進んでいく、すると、タクシー乗り場の乗車列の中にいる一人の男性の姿が眼に入った、めぐみはーーいたあーーと声を出す位嬉しくなつた。そう、あのさびしい眼をした男性がそこにいたの

だ、さびしい眼の男性は鞄の他に大きな紙袋を二つ下げてタクシー乗り場の列に並んでいる、そして、めぐみが歩いている姿に気付いてめぐみと視線が合つた。めぐみの足が止まって二人は明らかに見つめあつて、一人の距離は十メートル程しかない。間にあるのは人の波、越えられない程の人の波じゃない、でもめぐみは先ほど考えていた声をかける言葉を波の中にさらわれてしまった。二人は何か言いたげな表情のままじっと黙つて見つめ合つていた。タクシーに乗る順番が来てしまつた。さびしい眼の男性はタクシーに乗つてからも車中からめぐみを見ていた。タクシーが動き出す、車中から振り返りながらめぐみを見ている、どんどんその姿小さくなつてタクシーも遠くへ去つて行つてしまつた。あつけない幕切れだつた。舗道にとり残されためぐみが呆然と立ち尽くす、

「こんなシーンの映画見たわ、、、」

肩を落としたまま力なく歩き出しちゃうめぐみはIRSへ向かつた。

「おはようさん、」

デスクで書きものをしている岡良子に声をかける、

「あつおはよう、今日も沢山来てるわよ、」

葉書やメールの山を忙しそうにチェックしている、

「本當ね、」

「何か元氣ないんじゃない、」

「そんなことありません、私は元氣よ、」

めぐみは両手を胸の前に持つていきガツツポーズをとる、空元氣だ。

「今夜の分この中からえり分けて、」

「それじゃあ、取り掛かりますか、」

「コーヒー持つてくるから、」

隣のキッチンでコーヒーを入れまた戻つて來た。

「はいコーヒー、」

「ありがとう、」

めぐみはコーヒーを飲みながら葉書やメールを一つ一つ読んで整理し始めた。

「やうそ、ジョナサンからも手紙届いてるわよ、」

メーの山の中からジョナサンの手紙を見つけためぐみは、

「あつた、これだわ、一番先に読んじゃおう」と、

手紙の封を切つて読み出した。

「藤田めぐみ様へ、またお便りを出してしまいました。でも、おそらくあなた様に届く私の手紙はこれが最後の手紙になるでしょう。先週私の拙い手紙を放送していただき、ありがとうございました。少し照れくさく聽かせていただきました。私は妻への思いをなかなか断ち切れなくこのままでは自他共にだらしない男と認める他ありません。そこで私は一大決心をして、妻の思い出に決別する為に思いいきつて環境を変えることにしました。妻と知り合った会社も住んでいる町にもさよならをして別転地で新しいスタートを切ろうと思っています。娘の為にもその方が良いでしょう。私が立ち直らなければ娘に良い影響は与えられません。今のところ私新しい恋等とても無理、そんな勇気は出せそうにありません。駅の改札口ですれちがう女性に妻の面影を見てしまい、多分それだけに止まらず、私の中では恋と同じ感情が沸き起こりつつあったのですが、このままその女性を好きになってしまったら、本当は既に好きになっているのですが、それでもその女性に対しても失礼なことと思いました。妻に似ているからという出会い、その女性は許してくれるでしょうか、妻に似ている、このことはどうしようもありません。思い出の延長なのか、新しい恋なのか、良くわかりません。どちらしようもなく惹かれてしまつ、それだけは真です。どこの誰であるかわからないうちに、この町での最後の思い出として、私はその女性にありがとうございましたと心の中で言つことでしょう。この次の木曜日、六時少し前に、もし再び彼女の姿を見かけたら、私は彼女に心の中でこのありがどうを、そしてさよならを言つつもりです。定期券を拾ってくれた時に触れた彼女の柔らかい手の温もりは私にとって大切なクリスマスプレゼントになるでしょう。」

ガツチャーン、めぐみは突然飲みかけのコーヒーを床に落と

し、その割れる音がした。

「めぐみどうしたのよ！」

岡良子がダスターを持って来て床を拭きながらめぐみの顔を覗いたが、めぐみはその声にまるで気付かな様子でジョナサンの手紙を持ったまま完全にうろたえてしまった。

「どうしたのめぐみ！」

良子の怒鳴り声にめぐみはやつと氣付いて、良子に手紙を渡して急に大声を上げた。

「アーッ！」

そして両手で髪の毛をかきむしり、それからバンバンと音を立ててデスクを叩きたした。

「アーッ、どじょうひじょうひ！ 何よめぐみ、何がどじょうひなのよー！」

良子のきつい声でめぐみは一瞬我に返ったが、またすぐに焦点が合はない眼をして泣き叫んだ。正常ではなかつた。

「良子もつおしまいよ、何でわからなかつたんだろう、私つて駄目な女よ、恋愛するなんて番組やってても、何も知らない上べだけの女だったのよ。」

「いつたい何のことなのよ、めぐみ、何なのよ、」

「ジョナサンの手紙見てよ、」

良子はめぐみから手紙を受け取つて読み始める。

「めぐみ、ジョナサンどこかへ行つちゃうつてことだけど、そんなにジョナサンに思い入れしてたの、」

良子はめぐみとジョナサンはパーソナリティーとリスナーの関係それ以上の係わりはないと思つてゐる。だから良くわからない、めぐみのうろたえ様は明らかに異常なのだ。

「違うのよ、それだけじゃないのよ、私、このところ、さびしい眼の男性のこと話してたわよね、今日も駅前で出合つたの、今日は特別だったの、私、その男性会つたら、何が何でもお話するんだつて決めていたの、それが、それが、ござつて時に何も言に出せなくて、

黙つたまま見つめ合つていただけなのよ、多分カッパラーメンが出来る位の時間、彼もね、何か言いたそうだったの、大きな荷物両手に抱えていて、タクシーに乗つて行つてしまつたわ、行きすがりの人だつたけど、私ずっと気になつていて、私いつの間にか彼のこと好きになつていたんだわ、その人にもう会えないの、私にとつては、これだけでも今年一番の重大事件よ、それなのに、私もう神様なんて絶対に信じない、ジョナサンが、ジョナサンが、その男の人だつたなんて、それも、私のことをずつと思つてくれたなんて、それが、それが、みんな私の前から消えてしまうのよ、私、何にも悪いことなんかしてないのに、ひどすぎる、ひどすぎるわよ、こんな気持ちでこれからまた生きて行くの、いつそのこと、毒りんごでも食べて死んでしまいたいくらいよ、

めぐみは再び取り乱して泣きじゃくつた。良子はめぐみの言葉に目を丸くして驚いてしまつた。まるでありえない出会いである。心中で、出来すぎーと叫んで、ジョナサンの手紙を再び読み返した。

「めぐみ、めぐみ、まだ、まだ大丈夫よ、間に合うかも知れないよ、
「良子は、デスクに顔を伏せているめぐみの肩を叩きながら声をかけた。
「氣休めなんか言わないでよ、ジョナサンてラジオネームだもの、
「どこの誰だかわからないのよ、」
「めぐみよく聴きなさい、手紙に書いてあるでしょう、この町最後の思い出として、駅前のイルミネを娘さんに見せに来るつて、
「そんなこと書いてあつたー、」
「最後迄読んでないの、駄目ねー、ほら、最後のところ読みなさいよ、

良子は問題のところが書いてある部分を指差してめぐみに見せた。めぐみは良子から手紙を奪うようにして読み返す、

「本当ークリスマスイブ、今夜よ、今夜駅前のツリーの所に来て、でも何時に来るかわからっこない、駄目よ、」

「何言つていいの、例え何時にならひじ来る」とは確かに、簡単じゃない、めぐみがツリーの所でずっと待つていればいいんじゃないの、」

「そんな訳にはいかないわよ、番組だつてあるんだし、」
良子は少し考えて、いや、考えながらめぐみに言葉を並べた。番組を抜ける訳にはいかないのだ。

「んー、それはそうだけど、ジョナサンは娘さんと一緒に来る、だからー、」

ここ迄はゆうくりだつたけど、何かがピーンと来たよつて急に早口になつた。

「ジョナサン、めぐみの番組が始まる十時頃迄、四歳の娘さんを引き連れているなんて絶対ありつこないわよ、ジョナサンは娘の父さんなんでしょう。」

「やう、とつても良いお父さんよ、だから、だから私はママになつても良いと思つたんだもの、」

「その言葉本氣なの、めぐみ、いい加減なことじや出来ないのよ、ママになるつて、めぐみ、あなたの本当の子どもじゃないのだからね、只好きだからつて簡単な問題じやないのよ、よく考えた方がいいんじゃない、めぐみにとつても一生の問題だつて考えた方が、」

「そんなことわかつてゐわよ、でも、よく考えて好きになるとか、よく考えてママになるとか、そんな風に人間つてなれるものなの、私はなれないわ、私は、只どうしようもなく好きだと、ママになると、説明の出来ない私の純粹な気持ちでなりたいの、例え難しくつたつて、苦しくたつて、私はあの子のママになりたいって思つたの、だつてあの子には絶対ママが必要なのよ、そして、そしてジョナサンには私が、私が必要なよ。」

「えらい!めぐみ、さすがめぐみよ、卅九ポンポンだわ、めぐみの本当の気持ちよくわかつたわ、めぐみもこじりで決め時つてことだね、よしつ、それじゃ完璧にジョナサンに会えるよう、も

う一度よく考えなくっちゃね、待つてよきつとびつにかかるわ、
どうにかしなくっちゃね、」

良子はジョナサンの手紙を手にしてじっと見る、そして何回も頷いた。

「めぐみ、あなた今日出勤する時にジョナサンに会ったのでしょうか？」

「うん、」

泣きべその顔でめぐみが頷く、

「ジョナサン、前の手紙に確かに町に住んでいると書いてあったわ、
それなら多分、駅前に戻つて来るのは一時間後位ね、レストランで
食事してから来るみたいだから、クリスマスで混んでいるとして、
そうなると、駅前にやつて来るのは九時少し前になると思うよ、も
しレストランより駅前に来るのが先になつたとしても、いまから一
時間後つてとかしら、そうなると、めぐみがジョナサン達と会え
るのは、七時半頃から九時ちょっと過ぎ迄になるんじゃないの、絶
対に間違いないわよ、」

「それで大丈夫なの、本当に大丈夫なの、」

「何めそめそしてんのよ、大丈夫よ、駅前いれば絶対会えるつて、
でも、ジョナサン達に会つた後のことのはめぐみあなたの問題よ、私
はめぐみが戻つて来る迄に番組の準備してるから、めぐみは今から
駅前へ行つといでよ、でも、後悔しないでね、結婚するつてけつこ
う大変なのよ、特に仕事を持つ女性にとつてはね、私だつて口には
出せない苦労の連続なんだから、」

「良子ありがとう、」

「さあ、元気出して、答えが出たんだから後は実行するのみ、私は
残つて番組作りをするから、こっちのことは心配しないで、さあ、
勇気出して行つてらつしゃい、でもめぐみ、言つておくけど、番組
のタイムリミットは十時十五分前よ、絶対に穴はあけないでね、じ
やあ、めぐみこれで全てOK、

じゃないわ、メイク、それじゃあ行けないわ、直しといで、眼の周

りパンダみたいだから、」

良子が差し出した両手をめぐみはパチリと叩いて化粧室に行つた。今までこんなていたらくはほとんどない、泣き笑いのパンダの様な顔を鏡の中に見て、めぐみは嬉しくなつた。

メイクを直して控え室に戻る、良子もめぐみも黙つて頷いた。めぐみがドアに手をかけて出て行こうとした時、良子が声をかけて、真っ赤なりんごをめぐみの手に渡した。

「毒りんごよ！」

私は何て熱い親友を持つているんだろう、めぐみはとつても幸せな気分になつた。今からもつと大きな幸せがやつて来るんだ、いや作るんだ、めぐみの心の中にどんどん熱い決意が膨らんで行つた。午後七時過ぎ、めぐみは駅前のツリーの前に立つた。三十分程経過する、ビルの谷間を伝つてくる冷たい北風に、めぐみはコートの襟を立て両腕を胸の前で組んで温もりを保つた。めぐみの視線は広場にある時計塔に注がれる、めぐみ自身がほとんど時計の様になつっていた。

「ジョナサン、来て、、、」

めぐみは祈つた、祈らずにはいられなかつた。

「、、、昨年のクリスマスは悲しみの中で過ごしました。妻と奈美と私の三人のクリスマスがあまりにも楽しかつた、その思い出ばかりがどうどう巡りして、いたたまれませんでした。でも今年は少しだけ余裕が出来ました。昨年出来なかつた分も奈美には楽しいクリスマスにしてあげたいと思います。レストランで食事をし、M市の駅前のイルミネーションを見せてあげ、奈美の小っちゃな胸の中に大きな思い出を作つてげたいのです。私からのプレゼントも用意して、クリスマスがサンタクロースだけじゃないことを、少しだけでも奈美に理解してもらえたならと思つています。サンタがママを連れて来るなんて絶対にありえないこと、楽しい思い出をいつぱい与えて、ガツカリする時間を少しだけにしたいのです。うまくいくといいのですが、、、」

めぐみはジョナサンの手紙を思い出して笑みを浮かべた。

「大丈夫よ、絶対奇跡が起こるんだから、」

奇跡なんて本当は万に一つもない、運を天にまかせたその結果なんてことはほとんどない、あるのはその人の努力の結果で、それが奇跡を呼び起こしているのだ。めぐみもそう思っている。でも、今夜はそのポリシーが崩れそう、祈りの中にどうしても奇跡が欲しかった。駅前の人通りが少しづつ減り始めていく、めぐみは時計塔の秒針に合わせて呟いた。

「来る、来ない、来る、来ない、来る、」

「既に時計人間になつていて、そして、祈りの中で漂つて、両の手を握りしめて夜空を仰いだ。

「あー神様お願ひです、」

「時計塔が九時の時報を鳴らした。人通りがまばらになつてくる、ツリーの前はもうめぐ一人だけ、待ち合わせの人達はみんな約束どうりに消えてしまった。めぐみは時計塔を見上げてため息をつく、身体が震え寒さの限界が来ていた。駅前に流れているBGMがめぐみに聞き覚えのあるINTROを流しだす、山下達郎のクリスマスイブの曲が広場に聴こえてきた。めぐみは両手を顔に当てて、しばしそのままでいたが、それから、その手を払いのけて夜空を見上げた。涙が頬を伝つて流れ出した。時間がなくなつ来ている、めぐみはもう一度時計塔を見てからツリーの前に立ち直し、夜空に向かつて両手を広げおもいつきり何かを抱しめた。

「つかみ損ねた幸せって大きいのよね、これ以上待てないし、もういいわ、もういいのよ、やるべきことはやつたし、私の努力もこれが限界かな、運命もこれ迄、神様なんてやつぱりいないんだよね、きつぱりと諦めるしかないか、、、、」

めぐみはクリスマスのイルミネーションにしばし視線をやつてから、ゆっくりと踵を返してラジオ局へ戻ろうとした。

「やっぱり、さよならだけが人生か、、、、」

そう言つてポケットに手を入れると、良子から渡されたりんごが出

て来た。

「毒りんごか、 、 、 」

この時、めぐみは「のりんご」が毒りんごであつて欲しい、と願ったのかどうかわからないうが、一口ガブリとやつて頬張った。冷たくて甘い、気の遠くなるような味だった。

「パパー、こつち、こつち！」

「ほら、こつぱいあるだろ、ひ、」

「すつごーい！ とつてもきれい！」

クリスマスイブの曲が流れる中、めぐみは一人の声を聞き、歩みだした足を止めて勢いよく振り返った。

「来た！ 来たのよ！」 めぐみの両眼からとめどなく涙が溢れ、近付いて来る奈美とジョナサンの姿が、ぼやけてクリスタルの様に輝いて見えた。ツリーの前に立つてジョナサン達を見ているめぐみの姿に、ジョナサンが気付いて声を上げた。

「アッ、あなたは、 、 、 」

めぐみは黙つて頷いてジョナサンをじっと見つめる、ジョナサンもめぐみの瞳をじっと見つめた。奈美がイルミネーションの周囲をグルグル回つてはしゃいでいたが、ジョナサンの側にいるめぐみの存在に気付いて近寄つて来た。そしてめぐみの前にしゃがみ込むと、右手を差し出してめぐみの手を握り、めぐみの顔を見上げながらにつこりと微笑んだ。めぐみも身をかがめて奈美を見つめ微笑を返した。

「アーッー！ ママだあー！ ねえママでしょ、サンタさんが奈美にプレゼントしてくれた、ママでしょー！」

めぐみはしゃがみ込んで、両手で奈美的手を握り、答えた。「そ、う、よー、 、 、 」

-----完-----

(後書き)

絶対あり得ないことなんてこの世に存在しません。毎日を一生懸命生きていれば必ずあり得ないことが起こるのです。それが奇跡と呼ばれるものです。奇跡はいつでも誰かの側にわからない様に隠れているのです。私はこの奇跡をみんなに知つてもらおうと思い、拙い文章に書き続けて行きたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6375p/>

クリスマスイブ

2010年12月31日07時17分発行